

## 第2章 実施の効果とその評価

### 1. 目標の進捗状況および評価

#### ○本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

##### a 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数（179人）

あしなが学生募金、西日本豪雨募金をはじめとする募金活動、地域の清掃活動など様々なボランティア活動に自主的に取り組む生徒が多くいた。また、音楽部が国際ソロプチミスト奈良一万葉の「Sクラブ」に認証されている。

##### b 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数（12人）

長期はスウェーデンへの留学。短期の行き先はオーストラリア、アメリカ、カナダ、イギリス、フィリピン、タイ、韓国である。本年度も本校同窓会の協力を得て、留学生を経済的に援助していただいた。来年度以降もさらに多くの生徒が留学や海外研修に目を向け、積極的に参加していけるよう取り組みを進めたい。

##### c 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合（59%）

細かく見ると、1年生は、非常に思うが19.2%、少し思うが42.6%、あまり思わないが26.7%、全く思わないが11.5%。2年生は、非常に思うが19.4%、少し思うが35.5%、あまり思わないが25.1%、全く思わないが20.5%。3年生は、非常に思うが24.6%、少し思うが34.9%、あまり思わないが28.4%、全く思わないが12.2%であった。非常に思うは3年生が最も高くなっている。

現3年生は2年次に「非常に思う・少し思う」と答えた生徒の割合が55.1%とやや低かったが、3年次には59.5%と上昇した。海外・国内への研修旅行後の、未来創造会議へ向けての一連のSGHの取り組みの中で、グローバルな視点や何事にも積極的に取り組んでいこうとする意欲が育ってきたものと思われる。また、1年次と3年次を比較すると、非常に思うが18.6%から24.6%へ、全く思わないが8.6%から12.2%と、共に増加している。自らを見つめ、自らの考えをはっきりと示せるようになった生徒が増えたと考えられることができる。

##### d 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数（41人）

小さな親切運動ポスターや読書活動推進ポスター、少年非行防止標語や人権標語、エコノミクス甲子園、WRO（World Robot Olympiad）など、様々な大会に参加し、入賞をすることができた。WROでは2016年度にレギュラーカテゴリー・ミドル競技・高校生部門で全国優勝をしている。来年度以降も、高水準な大会に積極的に参加する生徒を増やしたい。

##### e 卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合（18.8%）

GTEC トータルスコア・グレード6以上の生徒の割合は昨年度とだいたい同じである。入学時から生徒たちのGTECのスコアは伸びてきており、特にListeningでは2年次の7月から12月の間にグレード6以上の生徒が大幅に増加している。これはALTとのTeam-teachingを主体とした様々な言語活動の取り組みの成果であると考えている。一昨年度だけCEFRのB1～B2の生徒の割合が高くなっているが、この学年は1年次の7月に受けたGTECのスコアを見たところ他学年より成績上位の生徒が多く、入学時点で英語力の高い生徒が多かったことがわかる。今後はこれまでの取り組みをさらに深化・発展させ、4技能ともに、全ての成績層の生徒のレベルアップを目指したい。

## ○指定4年目以降に検証する成果目標

### a 国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合 (21.9%)

京都大学・大阪大学・早稲田大学・同志社大学・立命館大学をはじめとするグローバル30の大学等に進学した生徒の割合。興味・関心と目的意識を持って、積極的に国際科に重点を置く大学へ進学する生徒をさらに増やしたい。

### b 海外大学へ進学する生徒の人数 (0人)

昨年度は韓国のハンドン国際大学とアメリカのDe Anza Collegeへ進学したが、本年度の海外大学への進学者はいなかった。現時点では海外の大学へ進学する生徒は非常に少ない状況であるが、海外研修や海外交流を行う中で生徒たちの視野を広め、海外の大学へ目を向ける生徒をもっと増やしていきたい。

### c S G Hでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合 (47.8%)

課題研究によって視野が広がり、自分の研究したいテーマというものをしっかりと持てた生徒も多く、そのことが大学の学部・学科を考える際に大いに影響を与えている。大学に進学した生徒が、将来、大学や大学院でも継続して研究を進めてくれることを期待している。

### d 大学在学中に留学または海外研修に行く卒業生の数 (21人)

アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、フィリピン、マレーシア、タイ、韓国、中国、台湾など様々な国に留学をしている。来年度以降、留学や海外研修に行く卒業生は年々増加することが見込まれる。

## ○グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット)

### a 課題研究に関する国外の研修参加者数 (34人)

海外フィールドワーク (オーストラリア8日間) に19人の生徒が参加し、現地での見学、連携校であるバイロンベイハイスクールでの授業等への参加、ホームステイ先での体験などを通して、課題研究に関わる研修を行った。また、日米草の根交流サミットに生徒15人が参加し、アメリカのシアトル・ワシントン州大会において、課題についてのプレゼンテーションを行った。

### b 課題研究に関する国内の研修参加者数 (272人)

京都大学での講義および学生との交流会、奈良県立医科大学での実習など、大学での研修等には多くの生徒が参加した。また、本校は奈良高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業の連携校として、様々な研究講座に参加させていただいており、物質材料研究機構、基礎生物学研究所、京都大学霊長類研究所、大阪大学免疫学フロンティアセンターなどでの実習にも参加した。これらの研修や研究講座については、教員が生徒たちに積極的に案内し、その魅力を伝えることで、定員を上回る生徒たちが参加を希望し、残念ながら参加できない生徒が出ることもあった。この5年間で、多くの生徒たちが授業や学校内での活動以外にも興味・関心を持ち、機会があれば積極的に研修等に参加するようになってきたのは確かである。来年度以降も、連携が可能な大学や企業・機関を開拓し、生徒が参加できる研修の機会を増やしていきたい。

### c 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数 (1校)

昨年度は2年生の研修旅行 (海外コース) 先、シンガポールの南洋理工大学の学生とディスカッションや交流をする事ができたが、本年度課題研究に関する連携を行ったのはオーストラリアのバイロンベイハイスクールのみであった。

**d 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）（29人）**

昨年度に引き続き、平田オリザ先生（東京芸術大学特任教授）、井上琢智先生（関西学院大学前学長）、真辺将之先生（早稲田大学教授）、久保博子先生（奈良女子大学教授）にお越しいただき、本年度は長野秀美さん（京都大学大学院農業研究科）にもお越しいただき、講義や指導をしていただいた。また、神戸大学大学院国際協力研究科の大学院生の方々、奈良先端科学技術大学院大学の大学院生の方々にもお越しいただき、生徒たちとの交流や意見交換会などを実施した。

**e 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）（9人）**

昨年度に引き続きアリアナ・ルキン・サンチェスさん（国連世界観光機関 アジア太平洋センター広報部課長）、福田純一さん（国連世界観光機関 アジア太平洋センター副代表）、細川長人さん（橿原市魅力創造部観光政策課課長）、新口絢子さん（NHK奈良放送局アナウンサー）、久保美智代さん（世界遺産研究家・フリーアナウンサー）にお越しいただいた他、本年度は鈴木宏子さん（UNWTOアジア太平洋センター代表補佐・国際部長）、増田修司さん（奈良県国際課課長）、今井大介さん（橿原市魅力創造部観光政策課課長補佐）にもお越しいただき、講義や指導をしていただいた。

**f グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数（45人）**

SGH甲子園、エコノミクス甲子園、科学の甲子園、数学甲子園、高校生ビジネスグランプリなど、多くの大会等に参加した。来年度以降も高い目標に積極的にチャレンジする気運を高め、様々な大会に参加していきたい。

**g 帰国・外国人生徒の受入れ者数（留学生も含む）（71人）**

アメリカから留学生を受け入れている。また、台湾の台南第一高級中学校の生徒や、フランスのイーゼン工科大学の学生が本校を訪問し、交流を行った。本年度はスケジュールの都合で連携校であるオーストラリアのバイロンベイハイスクールの生徒の受け入れはできなかった。

**h 先進校としての研究発表回数（4回）**

3年生が1年次から取り組んできた課題研究の成果を発表し、留学生等との協議や関係者の方々の助言をいただきつつ、外部へ向けて成果を発信する「未来創造会議－UNESCO（ユネスコ）会議」を7月末に開催した。また2月には2年次までの課題研究の成果を発表する「スーパーグローバルハイスクール研究発表会」を開催した。本校生徒の他、保護者、県内の高校、全国のSGH校に案内をし、多数の方々にご参加いただいた。その他、各種研究会などでの発表としては、奈良TIME学習指導研究会、第3回「地域と共にある学校づくり」つながりフォーラムにてSGHの取り組みの発表を行った。

**i 外国語によるホームページの整備状況（○）**

本校ホームページの一部を英語版として公開している。さらに内容を充実させていきたい。

**j 月平均の図書館の図書貸出冊数（383冊）**

本校図書館の書籍以外に生徒の希望する書籍を奈良県立図書情報館と橿原市図書館より借り受けている（年間92冊）が、これは数値には含めていない。例年月平均は300冊前後となっているが、本年度は貸し出し数が増加した。来年度以降も生徒の図書委員会を中心に図書館便りを充実させ、また校内ビブリオバトルや文化講座の開催にも今以上に力を入れ、生徒たちの興味・関心を高めることでさらに読書量を増やしたい。

平成30年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）									
		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数									
a	SGH対象生徒:			63人	123人	128人	114人	179人	240人
	SGH対象生徒以外:	人	10人	21人	12人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 課題研究のテーマに関連し、社会貢献活動を行う機会を積極的に紹介、奨励し、30年度に対象生徒の20%達成を目指す。									
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数									
b	SGH対象生徒:			10人	14人	10人	10人	12人	100人
	SGH対象生徒以外:	0人	2人	11人	2人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 留学生のための学校独自の基金を設立し、留学希望生徒を費用面で援助する。第2学年での有志生徒による交流校訪問を実施する。さらに2年目以降、交流校の数を増やす。									
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合									
c	SGH対象生徒:			69%	61%	57%	56%	59%	90%
	SGH対象生徒以外:	%	15%	66%	64%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 3つの課題研究を通し、グローバルな問題の解決に果たせる個々の役割を認識させることで使命感を涵養し続け、30年度には対象生徒の90パーセントを目標とする。									
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数									
d	SGH対象生徒:			21人	39人	48人	49人	41人	30人
	SGH対象生徒以外:	6人	10人	16人	7人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 校内にとどまらず、校外の高水準な大会に積極的に参加する生徒を育てることで入賞者数を増やす。									
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1~B2レベルの生徒の割合									
e	SGH対象生徒:			5.0%	15.5%	22.8%	19.8%	18.8%	90%
	SGH対象生徒以外:	32%	30%	1.4%	2.0%	%	%	%	%
目標設定の考え方: CAN-DO LIST の設定とGTEC受検により、明確な達成目標を示すことにより英語の4技能を伸ばし、SGH1期生が第3学年になる28年度には80%を目指す。									
(その他本構想における取組の達成目標)									
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
目標設定の考え方:									
1' 指定4年目以降に検証する成果目標									
		24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(33年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合									
a	SGH対象生徒:			23.8%	21.9%	%	%	%	50%
	SGH対象生徒以外:	26%	25%	%	%	%	%	%	%
目標設定の考え方: グローバル30の大学で、従来から本校生が志望する京大、大阪大、同志社大、立命館大に加え、SGHで連携する早稲田、上智大学などへの進学を奨励し数値を達成する。									
海外大学へ進学する生徒の人数									
b	SGH対象生徒:			2人	0人	人	人	人	30人
	SGH対象生徒以外:	0人	0人	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 海外交流や海外研修をする中で視野を広め、海外大学への進学がひとつの選択肢であることを理解させ、数値を達成する。									
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合									
c	SGH対象生徒:			30.0%	47.8%	%	%	%	70%
	SGH対象生徒以外:	-	-	%	%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 連携大学と協力し、アドバンスコースを中心に課題研究を大学レベルに引き上げ、他の生徒への波及効果を広げる。全員に達成感を持たせる指導を行い数値を達成する。									
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数									
d	SGH対象生徒:			15人	21人	人	人	人	200人
	SGH対象生徒以外:	-	-	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: スーパーグローバル大学で行われている留学プログラム等を積極的に紹介し、また大学卒業後海外で働くことを視野に入れたキャリアデザインを指導し数値を達成する。									

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	人	0人	0人	23人	24人	22人	34人	40人
目標設定の考え方：多くの生徒が国外研修に参加しやすいよう、経費の一部を補助することが可能な最大人数に設定。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	人	20人	130人	210人	201人	274人	272人	300人
目標設定の考え方：連携する大学を徐々に増やし、また課題のテーマに関連する事業を行う国際機関や、連携が可能な関連企業を開拓し、それらを訪問させることで数値を達成する。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	校	0校	1校	1校	1校	1校	1校	6校
目標設定の考え方：交流校と課題を共同研究し、また交流校に協力を仰ぎ、研究を高めるための英語文献などの資料入手等において、連携できる海外大学を模索していくことで数値を達成する。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	人	5人	29人	18人	21人	29人	29人	45人
目標設定の考え方：連携の大学より課題に関する指導を教員、学生に依頼。2年目以降にさらに研究の質を高めるために参画の回数を増やし、また新たな連携を開拓し数値を達成する。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	人	0人	4人	8人	8人	7人	9人	20人
目標設定の考え方：連携大学とUNWTOとは課題全般にわたって協力する。また課題ごとに連携が可能な企業を開拓して増やしていき、それらより講師を複数回招聘していく。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	人	20人	7人	37人	33人	46人	45人	200人
目標設定の考え方：視野を広げ、高い目標に積極的にチャレンジする気運を高めることで、校外の様々な大会に参加する生徒を増やす。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	1人	0人	69人	71人	15人	71人	71人	60人
目標設定の考え方：連携幹旋団体等を通じ、長期および特に短期の留学生を積極的に受け入れる。次年度他の団体とも連携していく。課題研究の質を高め本校で学習するメリットを広報する。								
先進校としての研究発表回数								
h	回	0回	1回	1回	3回	4回	4回	5回
目標設定の考え方：研究報告会の開催や、各種研修会において積極的に研究成果を発表する。								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i	×	×	×	△	○	○	○	○
目標設定の考え方：世界に向けて情報発信することで、本校の広報と海外校との交流推進を目指す。								
月平均の図書館の図書貸出冊数								
j		200冊	344冊	303冊	292冊	319冊	383冊	400冊
目標設定の考え方：様々な分野への興味関心を高めるとともに、主体的な探究心を養うことにより、読書量を増やす。								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	1,199	1,202	1,201	1,200	1,201	1,201	1,201
SGH対象生徒数			402	804	1,201	1,201	1,201
SGH対象外生徒数			799	396	0	0	0

## 2. 生徒の意識調査の結果とその考察

### (アンケートの概要)

第1回目の調査は年度の前半（2学期中間考査終了時）の10月中旬に、第2回目は2月6日に実施した。アンケートの内容は初年度から同じで、SGH導入による生徒の意識変化をみる8つの問いと、本校で以前から年度途中に実施していた学習状況調査にあった進路意識や読書・メディアへの関心に関する問いからなる。以下、行ったアンケート項目の中からSGHの取組による影響が見られると思われる項目を中心に分析、考察を行いたい。

### (生徒の意識の変化について)

生徒の意識変化を問う質問項目は、下記の通り。

※後述の質問について、下記の①～④の該当する選択肢番号をマークしてください。

① そう思う    ② だいたいそう思う    ③ あまりそう思わない    ④ そう思わない

問1 人の話をきちんと聞き、誰にでも話しかけることができる。(コミュニケーション力)

問2 誰とでも協調しながら、物事に取り組むことができる。(協調性)

問3 自分の役割を理解し、最後までやり遂げることができる。(責任感)

問4 先を見通して計画を立て、いろいろな工夫ができる。(計画性、企画力)

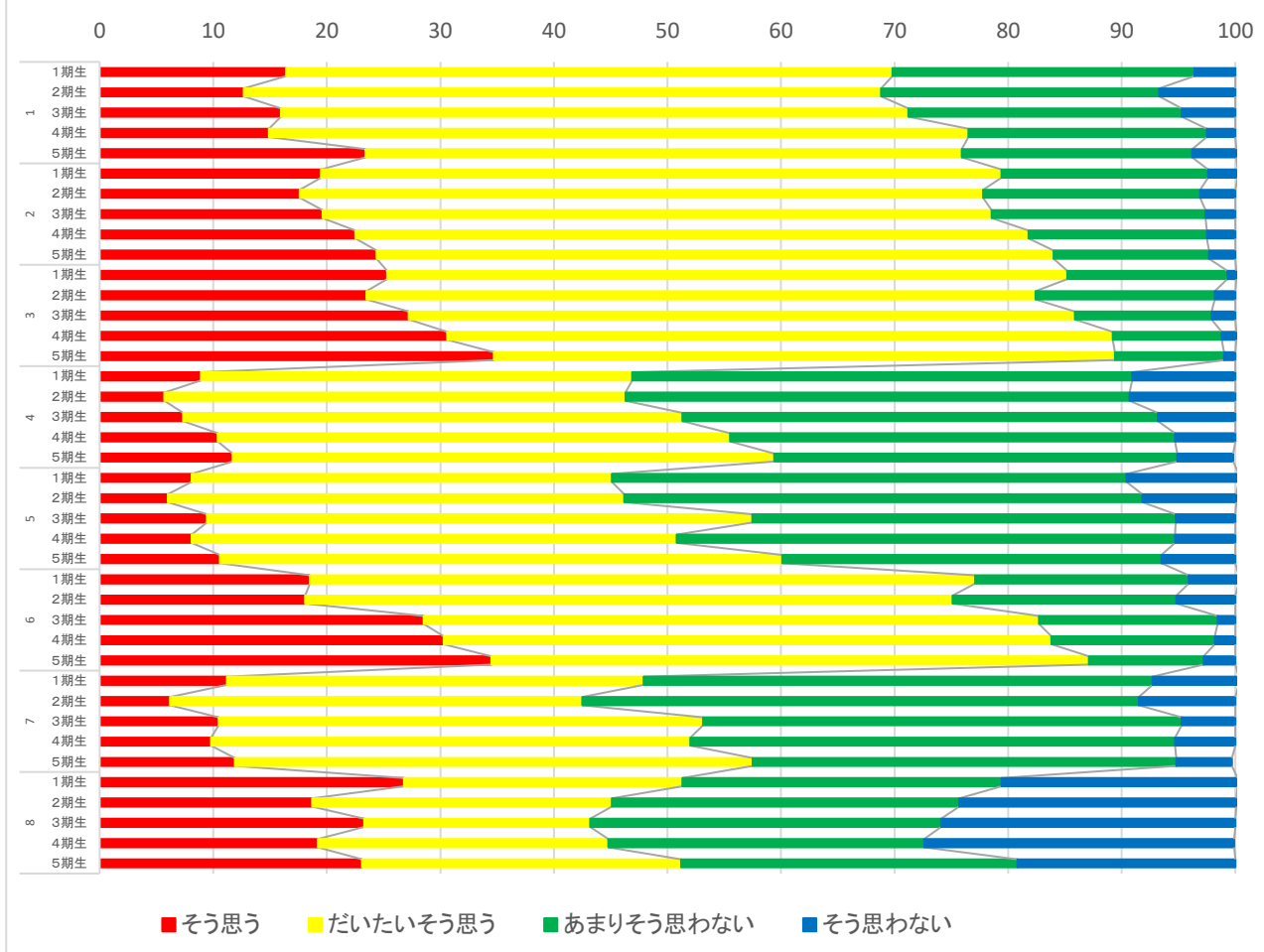
問5 必要な情報を適切に収集し、わかりやすいプレゼンテーションができる。(プレゼン力)

問6 情報モラルを理解し、情報機器やSNSを適切に活用することができる。(情報活用力)

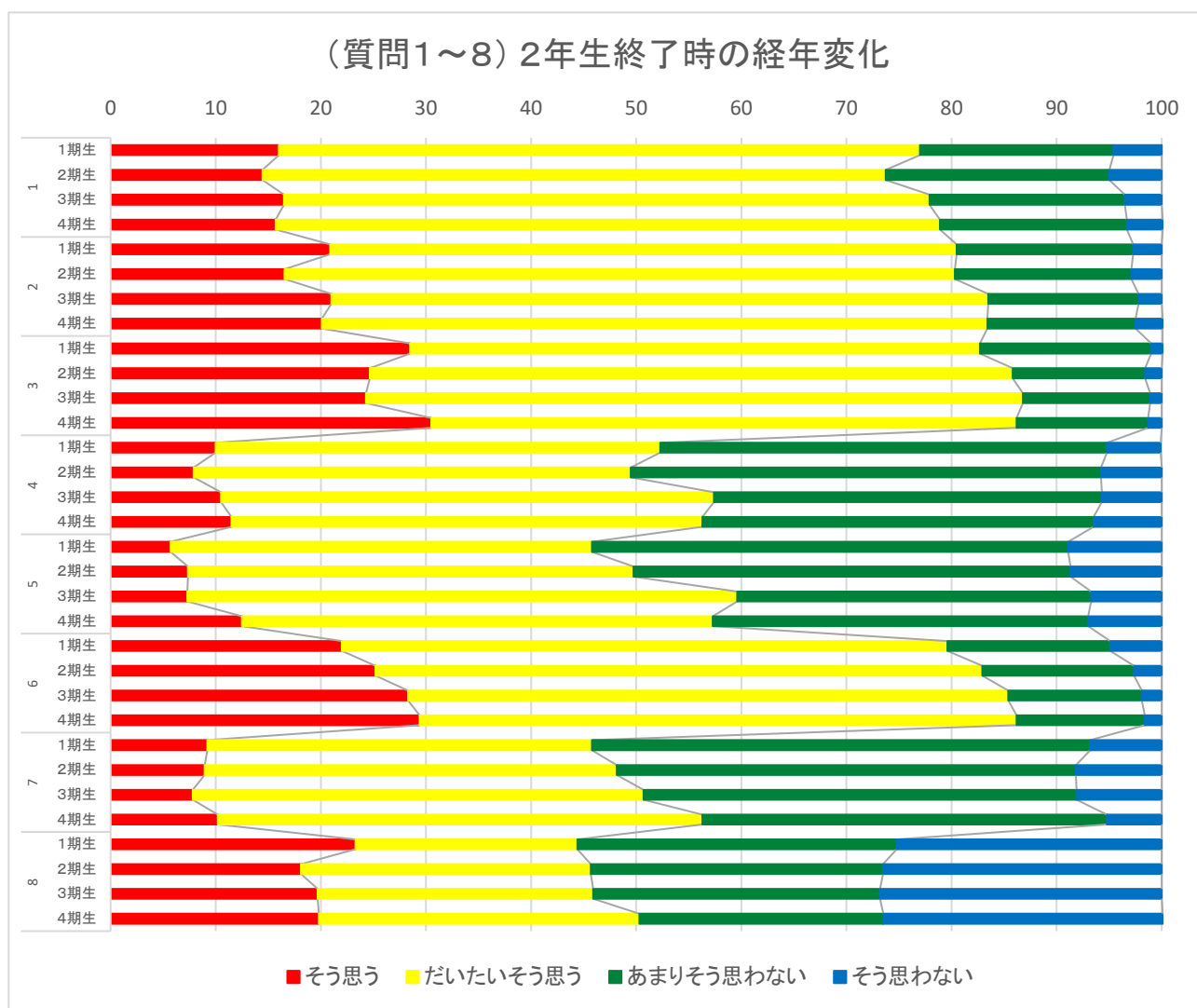
問7 収集した情報や自らの考えをまとめて、新たな発想を作り出すことができる。(創造性)

問8 将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したい。(国際的な視点でのキャリア志望)

(質問1～8) 1年生終了時の経年変化

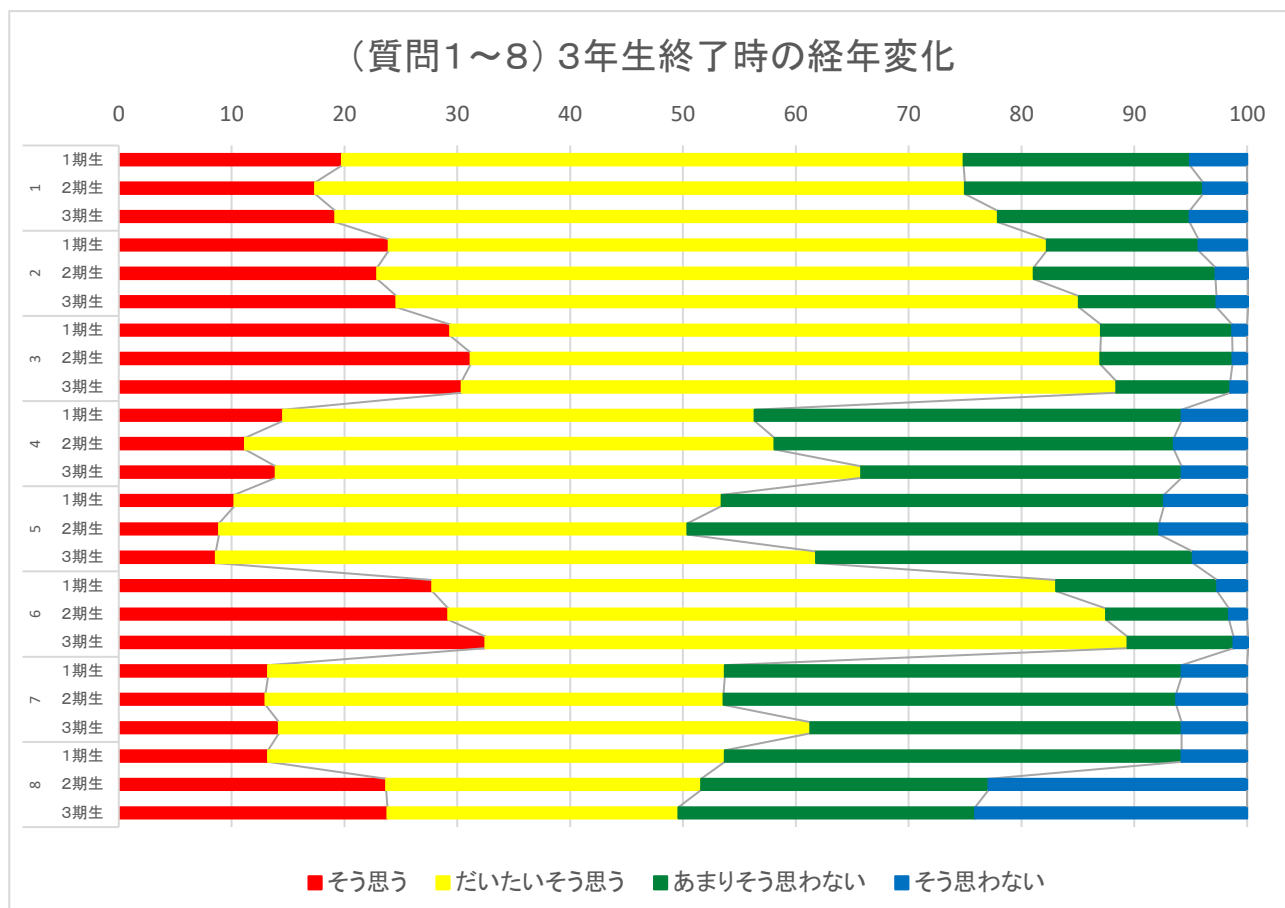


前ページのグラフは、本校がSGHを導入してから5年間の1年生終了時（2月）の経年変化をみたものである。本年度の1年生についてはほぼすべての項目において前年度より肯定的な回答（“そう思う”及び“だいたいそう思う”）をしているものの割合が増加している。これについては昨年度の報告書にも記したが、教科の指導や面談等を通じて分かってくることとして、中学校在籍時からSGH校として本校を意識し、志望校を決定してきたことが原因の一つにもあるようだ。問4（計画性、企画力）がここ3年間で過半数を超えてきたことも、このことが関係しているものと思われる。問5（プレゼン力）問9（創造性）についても伸びが大きい。2月に行われた「SGH研究発表会」に向けての「現代へのあゆみ」での発表内容をみても、従来よりわかりやすい発表と考えられた課題解決に向けての提案がなされていた。問8（国際的な視点でのキャリア志望）についてはここに来て数値が回復した。ISによるテロも一段落し、米朝首脳会談の実施など平和的な国際情勢に傾いてきたことがその原因の大きな要素だと考えられる。但し、長期・短期ともに海外留学の問い合わせ件数や人数は増えているものの、海外から本校へやってくる留学生の数が少なく、学校の中でALT以外にネイティブの方と話をする機会も少ないことは否めない。このあたりを是正しないと問8の肯定的な生徒の数の大きな増加は見込めないと考えている。本年度は「未来創造会議」においてSGH1期生でフィリピンでの支援活動に参加している生徒の講演をおこなったが、このような本校卒業生で大学在学中に海外留学をしている生徒をどのように活用するかが今後の検討課題であると考えている。



上記のグラフは、2年生終了時の同内容のグラフである。問1（コミュニケーション力）、問6（情報活用力）、問7（創造性）、問8（国際的な視点でのキャリア志望）の項目で、前年の2年生よりも

肯定的な回答をしている生徒が増加している。特に、問7（創造性）の伸びが大きい。2年生「現代の課題」の授業での課題研究は、研究で判明したことを踏まえて、課題解決のための提案を提示するように指導してきた。今年、2学期にポスターを使った発表を実施して、その発表に対する生徒同士の相互評価を具体的な形(生徒のアンケートの記述欄をそのまま文章として発表班それぞれに提示)で生徒に示した。3学期におけるパワーポイントを使ったプレゼン発表においては、生徒と担当教員の評価内容や疑問点、アドバイスを踏まえ、ポスター発表を改善する形での発表をおこなった。昨年までと異なり、他の班の発表と競い合うような雰囲気が見られたクラスもあり、それは課題解決の提案の独創性を競い合うという形で出てきていることが多かった。そのあたりの経緯が、問7の肯定的な回答の増加につながっているものと思われる。



(注) 3年生は2月に授業がないため、10月のアンケートデータで比較。

上記のグラフは、第3学年10月時点での1期生から3期生までの比較である。それぞれの肯定的な回答について、問8（国際的な視点でのキャリア志望）がややダウンしているが、その他の項目では上昇傾向で、特に問4（計画性、企画力）と問7（創造性）についてはかなりアップしている。課題研究の授業の進め方がある程度定着し、生徒の間にも浸透してきたことがその要因ではないかと考えられる。



(3年生における1期生から3期生までの意識変化比較)

次ページに「学習意欲」「世界的視野の思考」「現代社会に対する調査態度」「英文への慣れ」の4つの項目について、3年生10月時点での1期生から3期生までのデータを比較したものである。

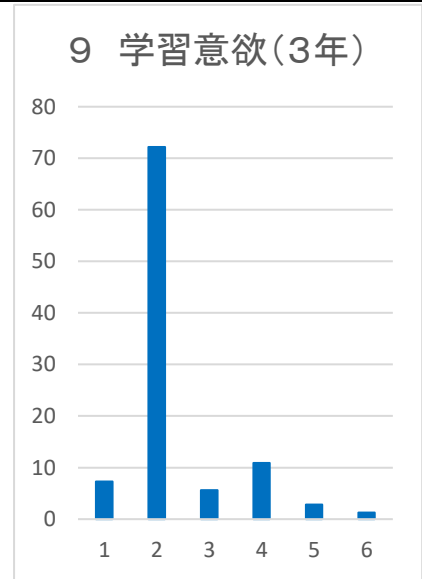
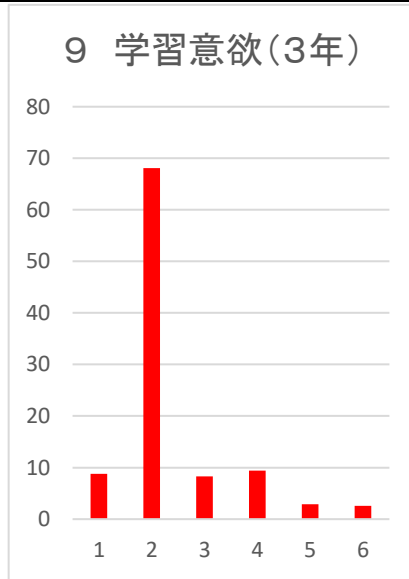
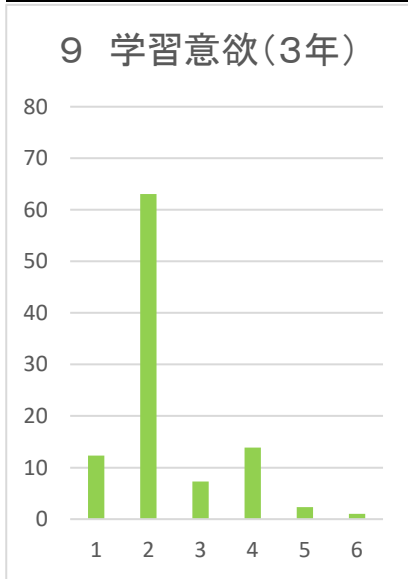
(左のグラフが1期生、中央のグラフが2期生、右のグラフが3期生)

(学習態度やキャリア意識の変化について)

Q あなたの学習について、現在の気持ちで最もあてはまるものはどれですか。

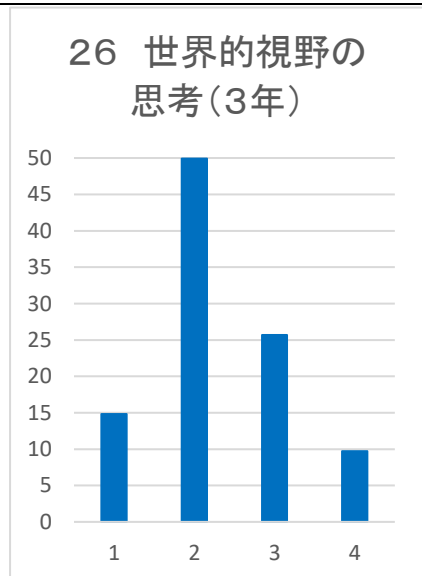
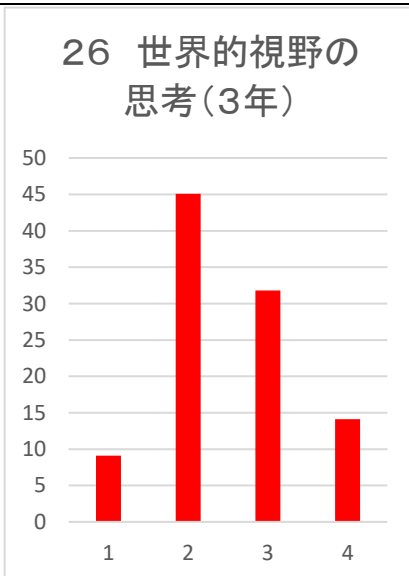
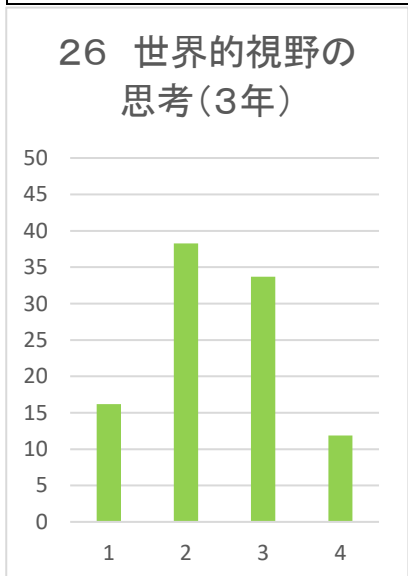
下記より1つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 勉強が楽しく、やる気に満ちている。
- ② がんばって今の成績を伸ばしたいと思っている。
- ③ 成績を伸ばしたいが、どうしたらよいかわからず悩んでいる。
- ④ 勉強が楽しいというわけではないが、とにかく勉強している。
- ⑤ なぜ勉強するかわからず、勉強はしたくないが、仕方なくしている。
- ⑥ 勉強が無意味に思え、勉強する気持ちになれない。



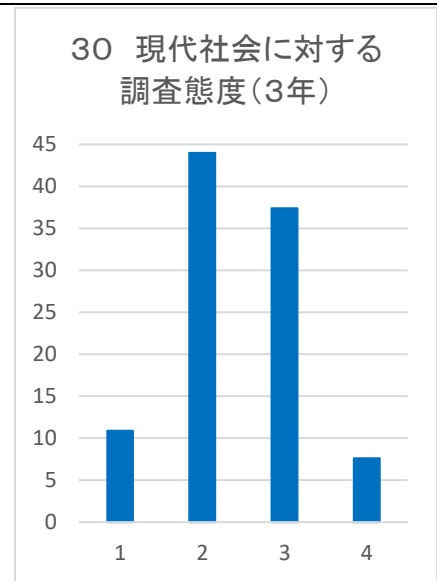
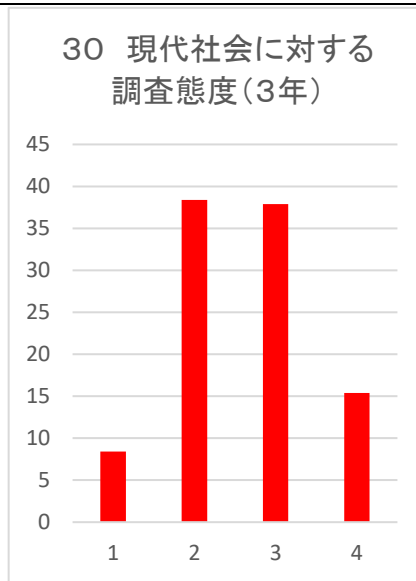
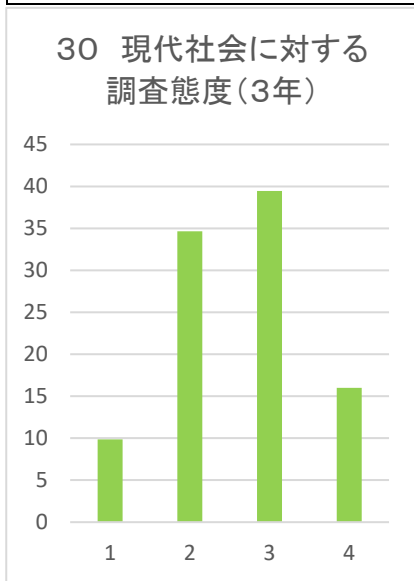
Q : あなたは、世界的な視野に立って物事を考えるようになりましたか。

- ①よく考える
- ②時々考える
- ③あまり考えない
- ④まったく考えない



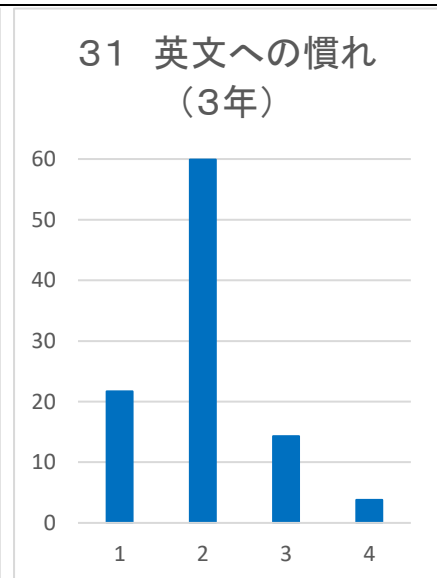
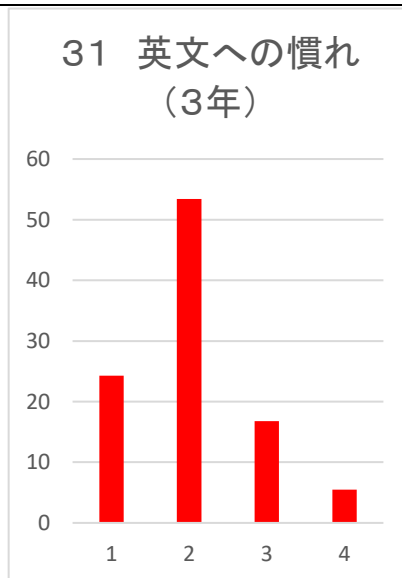
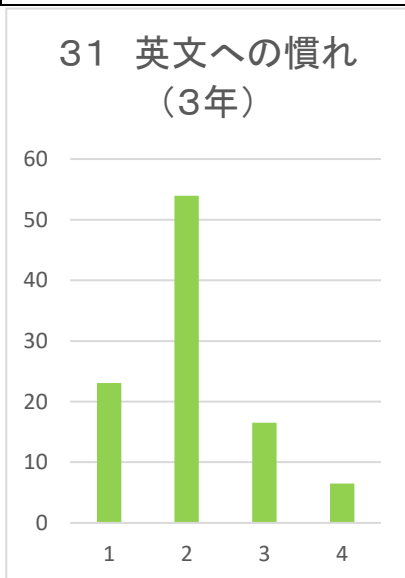
Q : (SFU の時間を通して)現代の社会に関する疑問点や諸問題について自分で調べたことがありますか。

- ①よく調べた ②時々調べた ③あまり調べなかった ④調べようと思ったことがない



Q : 英語の文章を読むことに慣れましたか。

- ①慣れた ②まあまあ慣れた ③あまり慣れない ④まったく慣れない



「学習意欲」については、年度を追うごとに肯定的な回答（選択肢の1と2の合計）が増加してきている。特に本年度（右）は合計すると79.5%で、ほぼ8割の高率になっている。

「世界的視野の思考」についても、肯定的な回答（選択肢の1と2の合計）が前年度より約10%増加し、64.7%と初めて60%を超えた。否定的な回答のうちの特に3（あまり考えない）と答えた生徒の減少が大きい。

「現代社会に対する調査態度」については、年度を追うごとに選択肢3から2への移動、及び特に今年度における4を選択した生徒の減少がグラフから見て取れる。肯定的な回答（選択肢の1と2の合計）は2期生までは半数を割っていたが、今年度の3期生では54.9%と過半数となった。

「英文への慣れ」についても肯定的な回答、特に選択肢の2が増加し、全体として肯定的な回答が微増している。

### 3. 次期教育課程について

#### ○概観

S GH事業最終年度に、本校では次期教育課程について検討を重ね、結果、次年度入学生を念頭に実施する新しい教育課程を策定することとなった。それは、S GH事業の中から課題として見えてきたこと、そしてその解決の方向性を探る中で見えてきたものを反映したものとなっている。ここでは、その課題と解決の方向性、次期教育課程において本校が実施していくことを順に説明していくことで、5年間の研究報告のまとめに替えたい。

#### ○課題と解決の方向性について

ここまで見てきたように、5年間のS GH事業の中で、自主的に社会に貢献する意欲、主体的に学習に取り組む態度を培うことについては成果を上げてきたと言えるが、一方で、これらを実現するための教科間連携、課題研究と自らのキャリアを繋げる意識等については十分実現できてきたとは言えないと考えている。研究開始時点で構想された、平常の授業で教科間の協力によって教科横断的学習を進めることや、特定の教科科目内で担当教員の努力によりアクティブ・ラーニングを進めることについては、多大なコストに見合う成果が見込めないと判断し、別な形での推進を考えた方がよいという結論に達した。

運営を担当する教員の負担も、決して軽視できない。事業開始当初は初めての経験に戸惑いの連続で、運営の中核となった教員も、また、直接生徒の指導等に携わるだけの教員にも、従来の指導に上乘せをする形で負担が増大した。もちろん、5年間で蓄積が生まれ、また、事業の進行に伴い生徒の成長等から得られた成果によって負担が軽減する側面はある。しかしながら、生徒が成長してできることが増えれば、それだけ上を目指して目標を設定し直すのが教育の仕事である以上、生徒が成長したから負担が減るということはないのが教育現場の状況である。従って、教員の負担軽減は、あらかじめシステムとして準備をしておかなくては解決しない。

このことを解決するために、教員を支援する仕組みを準備しながら、教育課程を再編成し、効果が大きかった取組と効果が見えにくかった取組を整理した上で、改めて「課題研究」を核として教育課程を編成し直すのが適切と考えた。年2回の発表会や海外研修、フィールドワークなど、本事業が骨格としてきた取組の大枠はそのままに、より効率化を進めるという方向性である。

その際、新たなキーワードとなるのが「Glocal」である。これまでも、本校の事業ではグローバルな視野で地域の課題を考えることを一つの柱としてきたが、地域 Local とのつながりを考えさせることで、世界 Global が単なる題目ではなく自分たちの身の回りの現実や自分自身のキャリアと結びついたものになるという狙いがある。

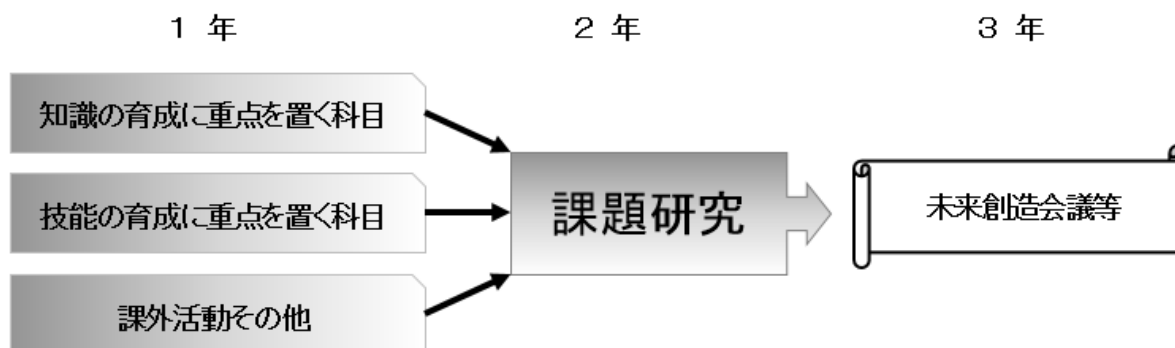
以上を踏まえて、以下に具体的な計画を述べる。

#### ○次期教育課程の具体的な計画について

第2学年に「課題研究(2単位)」を設定し、各教科の連携協力を「課題研究に資する学力の育成」と位置付ける。その際、各教科を色分けし、課題研究との関連性を明確にすることで、その強み弱みを十全に発揮できるようにする。

従来、特定の教科に全面的な協力を依頼することで、当該教科の教科としての自主性とのバランスが取れなくさせてしまったり、逆に事業と縁遠い教科が生まれてしまったりという事態が発生していた。S GH事業それ自体も、教科横断をうたいながら地歴公民を主眼とする縛りがあり、理系科目の研究に十分傾注できない面があったため、理系の生徒から「事業の意義が分からない」という不満が聞かれることもあった。

そこで、総合的な探究の時間を「課題研究」と明示して、全ての教科の教員が学年全ての生徒の課題研究に関わることにすることで、理系文系に関わらない研究を生徒に行わせ進路と課題研究が分離することがないようにした。また、教科の色分けにより、各教科が課題研究にどのように関連するかを明確にする（下図参照）。これにより、各教科にも教育課程全体への意識を育みつつ、教科の主体性を発揮してもらうことが期待される。



第1学年（教科学習を課題研究に繋げる学年）

- ・ A教科…知識の育成に重点を置く  
理科、家庭科、保健体育科、芸術科
- ・ B教科…技能の育成に重点を置く  
国語科、地歴公民科、数学科、英語科、情報科、グローバルコミュニケーション科（学校設定教科）  
（特にグローバルコミュニケーション科では、主体的な表現活動やグループワーク等を通して第2学年での課題研究に必要な能力を育む。）
- ・ その他関心・意欲を高める取組…語学研修、国際会議の開催協力、課題研究発表会、地域・国際交流活動等

第2学年（課題研究を中心に深い学びを実現する学年）

- ・ 「課題研究（総合的な探究の時間）」2単位＋「情報の科学」1単位  
（計3単位の中で、地域に関する探究的な学習「奈良 TIME」に取り組む。）
- ・ 「未来創造会議」（7月）への参加、「課題研究発表会」（2月）の開催により、研究・提案することと社会との繋がりを実感させる。
- ・ 海外研修旅行（台湾3泊4日）に取り組むとともに、「課題研究」の中で県内フィールドワークを実施し、研修旅行と課題研究の連携を図る。
- ・ 希望者に選択科目「課題研究 α」1単位（増加単位）を受講させるとともに、その一部を公開講座として開放し、希望者が参加できるようにする。また、「課題研究 α」の受講者を対象に海外交流校での海外研修（オーストラリア6泊8日）を実施する。
- ・ その他の取組…近隣大学等との連携による外部フォーラム、コンテスト等への参加、地域・国際交流活動等

第3学年（課題研究と社会との繋がりを考えさせる学年）

- ・ 「未来への航海図（総合的な探究の時間）」1単位における課題研究の深化と自己の進路との関連を考える。進路によってはレポートの作成指導等も行う。
- ・ 「未来創造会議」（7月）の開催により、企画・提案するプレゼンテーションの力を育み、また、地域課題に対する提案などを行うことによって、課題研究と社会、自らのキャリアデザインとの関連付けを意識させる。

#### ○展望

これらの取組により、

- 1 S G H事業の遺産（S G Hレガシー）の継承
- 2 S G H事業で課題とされた点の解決

### 3 地域を牽引するグローバルな視点をもった次世代リーダーの育成

…を目指している。これらを実現していく上で、かつ実行可能な教育課程が、次ページに掲載する平成31年度入学生の教育課程であると考えている。

また、この取組は当然ながら、相互に関連しつつ次のような学びを実現することになる。

- ・主体的な学び  
自らの興味関心を元にした課題研究、学びと自己のキャリアの関連
- ・対話的な学び  
グループを単位とする生徒の協働、地域の方、研究機関や先人との対話
- ・深い学び  
各教科の力を相互に関連させ、社会の課題解決に取り組む

すなわち、新学習指導要領で目指される「主体的・対話的で深い学び」を実現していくものであり、これからの時代に必要とされる力を生徒に育成していく上で有効なものと考えている。

地域の教育の中核を担う公立校としての本校の在り方を考えるとき、これまで伝統の中で培ってきた信頼に十分応えつつも、常に次の時代に必要な学びの力を先取りして採り入れ、それを具体的な教育の形として示していく責任がある。

これまでの5年間、SGH事業の趣旨や実施する事業内容について説明させていただいた関係者、同窓生、保護者の皆様から、本校がSGH事業に取り組む意義について、熱い期待と支援と信頼とを常に寄せ続けていただいた。もちろん、批判の声もないわけではなかったが、そのほとんどは事業の否定でなく叱咤激励に属するものであり、また、ごく少数の否定的な意見も事業の進展と共に薄らいできた。また、大学や民間からの「SGH」にかけられる期待や支援も大変大きなものがあった。その一部は連絡協議会の際にも紹介があったが、それ以外にもSGHをテーマに発表の舞台を用意していただいたり、情報や講演を無償で提供いただいたり、交流や協力のお声をかけていただいたりということは数え切れないほどあった。学校の体制に十分な余裕が無くその機会を全て生かし切れなかったことは大変残念であるが、事業に対する社会からの期待を常に感じ、これからの教育が歩むべき方向性を常に考えさせられ続けた5年間だった。

その中で、他の都道府県や他校の後追いではなく、また旧に戻るのでもなく、SGH事業に取り組んだ成果を生かした新しい教育課程を策定できたことは、事業の総括として意義あることと言える。来年度入学してくる生徒と本校の今後に期待するとともに、次年度からスタートする予定の、本県の「総合的な探究の時間」教科等研究会（その事務局を、当面本校が担っていく予定であるが）等を通して、その意義を広く周囲に伝えることができると考えている。